

鎮西八郎

楠山正雄

青空文庫

はちまんたろうよしいえ
 八幡太郎義家から三代めの源氏の大将を六条判官
 ためよし
 為義といいました。為義はたいそうな子福者で、男の子供
 だけでも十四五人もありました。そのうちで一番上のにいさんの
 よしとも
 義朝は、頼朝や義経のおとうさんに当たる人で、なかなか
 つよ
 強い大将でしたけれど、それよりももつと強い、それこそ先
 んぞ
 祖の八幡太郎に負けないほどの強い大将というのは、八男
 ちんぜい
 の鎮西八郎為朝でした。

ためとも
 なぜ為朝を鎮西八郎というかといいますと、それはこう

いうわけです。いったいこの為朝ためともは子供こどものうちからほかの兄きょう弟だいたちとは一人ひとりちがつて、体からだもずつと大きいし、力ちからが強つよくつて、勇気ゆうきがあつて、世よの中に何なに一つこわいというものがない少年しょうねんでした。それに生うまれつき弓ゆみを射いることがたいそう上手じょうずで、それこそ八幡太郎はちまんたろうの生うまれかわりだといわれるほどでした。それどころか、八幡太郎はちまんたろうは弓ゆみの名人めいじんでしたけれど、人並ひとなみとちがつた強つよい弓ゆみを引ひくということはなかつたのですが、為朝ためともは背せいの高たかさが七尺しやくもあつて、力ちからの強つよい上に、腕うでが人並ひとなみより長ながく、とりわけ左ひだりの手みぎが右みぎの手すんより四寸すんも長ながかつたものですから、並なみの二倍ばいもある強つよい弓ゆみに、二倍ばいもある長ながい矢やをつがえては引ひいたのです。ですから為朝ためともの射いる矢やは、並なみの人の矢やがやつと一町ちやうか二町ちよほし走

るところを五町も六町の先まで飛んで行き、ただ一矢で敵の三人や四人手負わせないことはないくらいでした。

こんなふうですから、子供の時から強くつよつよ、けんかをして、

ほかの兄弟たちはみんな負かされてしまいました。兄弟

たちは為朝が半分はこわいし、半分はにくらしがって、何

かにつけてはおとうさんの為義の所へ行つては、八郎がいけ

ない、いけないというものですから、為義もうるさがって、度

々為朝をしかったです。いくらしかられても為朝は平気で、

あいかかわらず、いたずらばかりするものですから、為義も困り

きつて、ある時、

「お前のような乱暴者を都へ置くと、今にどんなことをしでか

すかわからない。今日きょうからどこへでも好きすな所ところへ行いつてしまえ。」
といつて、うちから追おい出だしてしまいました。その時とき為ため朝ともは
やつと十三になつたばかりでした。

うちから追おい出だされても、為ため朝ともはいつここう困まつた顔かおもしない
で、

「いじのわるいにいさんたちや、小言こごとばかりいうおとうさんなん
か、そばにいない方ほうがいい。ああ、これでのうのうした。」
と心こころの中なかで思おもつて、家来けらいもつれずたつた一人ひとり、どこどこというあて
もなく運うんだめしに出いかけました。

国々くにぐにを方々ほうぼうめぐりあるいて、為朝ためともはどうとう九州きゅうしゅうに
 渡りわたました。その時分じぶん九州きゅうしゅうのうちには、たくさんの大名だいまいよう
 があつて、めいめい国くにを分け取りわけどにしました。そしてそのて
 んでんの国くににかめしいお城しろをかまえて、少すこしでも領分りようぶんをひ
 ろめようというので、お隣となり同士どうし始終しじゆう戦争せんそうばかりしあつてい
 ました。

為朝ためともは九州きゅうしゅうに下くだると、さつそく肥後ひごの国くにに根城ねじろを定め、
 阿蘇あそ忠国ただくにという大名だいまいようを家来けらいにして、自分じぶん勝手に九州きゅうしゅうの
 総追捕使そうつうしという役やくになつて、九州きゅうしゅうの大名だいまいようをのこ残のこらず打ちうち従したが
 えようえいようとしました。九州きゅうしゅうの総追捕使そうつうしというのは、九州きゅうしゅうの

総督そうとくという意味いみなのです。すると外ほかの大だい名みやうたちは、これも半分はんぶんはこわいし、半分はんぶんはいまいましたがって、

「為朝ためともは総追捕使そうつうほしだなんぞといって、いばっているが、いったいだからゆるされたのだ。生意気なまいきな小僧こぞうじゃないか。」

と、いいいい、てんでんのお城しろに立たてこもって、為朝ためともが攻せめて

来きたら、あべこべにたたき伏ふせてやろうと待まちかまえていました。為朝ためともは聞きくと笑わらって、

「はッは。たかが九きゆう州しゆうの小大名こだいみやうのくせに、ばかなやつらだ。いったいおれを何なんだと思おもっているのだろう。子供こどもだって、りっぱな源氏げんじの本家ほんけの八男なんじゃないか。」

こういって、すぐ阿蘇忠国あそのだくにを案内者あんないしやにして、わずかな味方みかた

の兵へいを連れたなり、九州きゅうしゅうの城しろという城しろを片かたつぱしからめぐり
 歩あるいて、十三の年としの春はるから十五の年としの秋あきまで、大戦おおいくさだけでも
 二十何度なんど、その外ほか小さな戦いくさは数かずのしれないほどやって、攻め落おと
 した城しろの数かずだけでも何十箇所なんかしよというくらいでした。それで三年ねんめ
 の末すえにはとうとう九州きゅうしゅう残のこらず打ち従したがえて、こんどこそほんとうに
 総追捕使そうつういほしになつてしまいました。
 すると為朝ためともに打ち従したがえられた大名だいみょうたちは、うわべは降こう
 参ました体ていに見みせかけながら、腹はらの中ではくやくしてくつてくやくして
 つてなりません。そこでそつと都みやこに使つかいを立たてて、為朝ためとも
 が九州きゅうしゅうに来てさんざん乱暴らんぼうを働はたらいたこと、天子てんしさまのお許ゆる
 しも受うけないで、自分勝手じぶんかたてに九州きゅうしゅうの総追捕使そうつういほしになつたことな

どをくわしく手紙てがみに書き、その上に為朝ためともの悪口わるくちを有あること無な
 いことたくさんにならべて、どうか一日いちにちも早くはや為朝ためともをつかまえて、
 九州きゅうしゅうの人民じんみんの難儀なんぎをお救すくい下くださいと申し上げました。
 てんし 天子さまはたいそうお驚おどろきになつて、さつそく役人やくにんをやつて
 ためとも 為朝ためともをお呼よび返かえしになりました。けれども為朝ためともは、
 「きつとこれはだれかが天子さまてんしに讒言ざんげんしたにちがいない。天て
 子んしさまには、間違まちがいだからといつて、よく申し上げあてくれ。」
 といつて、役人やくにんを追おい返かえしてしまいました。
 ためとも 為朝ためともがいうことをきかないので、天子さまてんしはお怒おこりになつて、
 子供こどもの悪いわるのは親おやのせいだからといつので、おとうさんの為義ためよし
 を免職めんしよくして、隠居いんきよさせておしまいになりました。

為朝ためともは、おとうさんが自分の代わりじぶんに罰ばつを受けたということうを聞ききますと、はじめてびつくりしました。

「おれは天子てんしさまのお罰ばつをうけることをこわがって、都みやこへ行かないのではない。それを自分じぶんが行かないために、年としを取られたおとうさんがおとがめをうけるといふのはお氣きの毒どくなことだ。そういうわけなら一日いちにちも早く都みやこに上あつて、おとうさんの代わりかにどんなおしおきでも受けるうことにしよう。」

こういつて為朝ためともはさつそく今いまの樂たのしい身分みぶんをぼんと棄すてて、前まえに下くだつて來きた時ときと同どう様よう、家來けらいも連つれずたつた一人ひとりでひよつこり都みやこへ歸かえつて行いこうとしました。ところが長ながい間あいだ為朝ためともになつて、影身かげみにそうように片時かたときもそばをはなれない二十八騎きの武士ぶし

が、どうしてもお供ともについて行きたいといつてききませぬので、
 為ためとも朝も困こまつて、これだけはいつしよに連れて都みやこのほに上ることにし
 ました。

こういうわけで 九きゅう州しゅうから為ためとも朝について来た家来けらいは二十八
 騎きだけでしたが、どうしてもお供ともができなければ、せめて途とちゅう中
 までお見送りみおくがしたいといつて、いくら断ことわつても、断ことわつても、ど
 こまでも、どこまでも、そろそろついてくる家来けらいたちの数かずはそれ
 はそれはおびただしいものでした。為ためとも朝は力ちからが強つよいばかりでな
 く、おとうさんに孝こうしん心ぶかいと同どうよう様、だれに向むかつても情なさけ
 ぶかい、心こころのやさしい人でしたから、三年ねんいるうちにこんなにお
 勢おぜいの人から慕したわれて、ほんとうに九きゅう州しゅうの王おうさま同どうよう様だつ

たのです。それでだれいうとなく、ためとも為朝のことを鎮西八郎ちんぜいはちろうと呼ぶようになりました。鎮西ちんぜいというのは西の国にしくにということで、九州きゅうしゅうの異名いみょうでございます。

三

さて為朝ためともは一日いちにちも早くはやおとうさんを窮きゆうくつ屈くつなおしこめから出だしてあげたいと思おもつて、急いそいで都みやこのほに上ありました。ところが上のほつてみておどろいたことには、都みやこの中はざわざわ物騒ものさわがしくつて、今いまに戦争せんそうがはじまるのだといつて、人じん民みんたちはみんなうろたえて右みぎに左ひだりに逃にげ廻まわっていました。どうしたのだらうと思おもつて聞き

くと、なんでも今の天子さまの後白河天皇さまと、とうにお位
 をおすべりになつて新院とおよばれになつた先の天子さまの崇
 とくいん 徳院さまとの間あいだに行きちがいができて、敵味方てきみかたに別れて戦せんそ
 争うをなさろうというのでした。朝ちやうてい廷ていが二派ふたはに分かれたもの
 ですから、自然しぜんおそばの武士たちの仲間なかまも二派ふたはに分かれました。
 そして、後白河天皇ごしらかわてんのうの方ほうへは源義朝みなもとのよしともだの平清盛たいらのきよもりだ
 の、源三位頼政げんざんみのよりまさだのという、そのころ一ばん名高い大將たいしよう
 たちが残のこらずお味方みかたに上がりましたから、新院しんいんの方ほうでも負けず
 に強い大將つよ たいしようたちをお集あつめになるつもりで、まずおとがめをう
 けて押おしこめられている六条判官ろくじょうほうがんが為義ためよしの罪つみをゆるして、味
 方かたの大將軍たいしようぐんになさいました。為義ためよしはもう七十の上を出た年と

寄りのことでもあり、天子さま同士のお争いでは、どちらのお身方をしてもぐあいが悪いと思つて、

「わたくしはこのまま引き籠つていとうございます。」

といつて、はじめはお断りを申し上げたのですが、どうしてもお聞き入れにならないので、しかたなしに長男の義朝をのけた外の子供たちを残らず連れて、新院の御所に上がることになりました。

そういうさわぎの中に為朝がひよつこり帰つて来たのです。

為義ももう昔のように為朝をしかっているひまはありません。大よろこびで、さつそく為朝を味方に加えて、みんなすぐと出陣の用意にとりかかりました。

四

為朝ためともはやがて二十八騎きの家来けらいをつれて新院しんいんの御所ごしよに上あがり
 ました。新院しんいんは味方みかたの勢せいが少すくないので心配しんぱいしておいでのなる
 ところでしたから、為朝ためともが来きたとお聞ききになりますと、たいそ
 うおよろこびになつて、さつそくおそばに呼よんで、

「いくさの駆かけ引ひきはどうしたものだろう。」

とおたずねになりました。すると為朝ためともはおそれ気げもなく、は
 つきりと力ちからのこもつた口調くちようで、

「わたくしは久ひさしく九州きゅうしゅうに居おりまして、何なん十度どとなくいくさ

をいたしましたが、こちらから寄せて敵を攻めますにも、敵を引
 きうけて戦いますにも、夜討ちにまさるものはございません。今
 夜これからすぐ敵の本營の高松殿におしよせて、三方から火
 をつけて焼き立てた上、向かつてくる敵を一方に引き受けてはげ
 しく攻め立てることにいたしましょう。そうすると、火に追われ
 て逃げてくるものは矢で射とります。矢をおそれ逃げて行くも
 のは火に焼き立てられて命を失います。いずれにしても敵は袋の
 中のねずみ同様手も足も出せるものではございません。それに
 あちらへお味方になられた武士の中で、いくらか手ごわいのはわ
 たくしの兄義朝一人でございりますが、これとてもわたくしが矢
 先にかけて打ち倒してしまいます。まして清盛などが人なみに

ひよろひよろ矢のや一つ二つ射いかけましたところで、ついこの鎧よろいの袖そでではね返かえしてしまふまででございませぬ。まあ、わたくしの考かんがえでは、夜の明あけるまでもございませぬ。まだくらいうちに勝負しょうぶはついてしまひませう。御安心ごあんしん下さいまし。」

といひました。

為ため朝ともがこうりつぱに言いいきりますと、新院しんいんはじめおそぼの

人ひとたちは、「なるほど。」と思おもつて、よけい為ため朝ともをたのもしく

思おもひました。するとその中なかにで一人左大臣ひとりさだいじんの頼より長なががあざ笑わらつて、

「ばかなことをいへ。夜討ようちちなどということは、お前まえなどの仲間なかま

の二十騎きか三十騎きでやるけんか同どう様ようの小こぜりあいならば知しらぬ

こと、恐おそれ多おほくも天てん皇のうと上じよう皇こうのお争あらそいから、源げん氏じと平へい家けが

てきみかた
敵味方に分かれて力くらべをしようという大いくさだ。そんな
ひきよう
卑怯な駆け引きはできぬ。やはり夜の明けるのを待つて、堂
う
々と勝負を争う外はない。」

と云つて、せつかくの為朝のはかりごとをとり上げようとも
しませんでした。

為朝は、おもしろく思いませんでしたけれど、むりに争つて
おも
もむだだと思ひましたから、そのままおじぎをして退きました。

そして心の中では、

「何も知らない公卿のくせによけいな差し出口をするはいいが、
いま
今にあべこべに敵から夜討ちをしかけられて、その時にあわてて
もどうにもなるまい。こんなふうでは、この戦にはとても勝てる

見込みはない。まあ、働けるだけ働いて、あとはいさぎよく討ち死にをしよう。」

とおも
と思いました。

こう覚悟をきめると、それからもう為朝はぴったり黙り込んだまま、しずかに敵の寄せてくるのを待っていました。

すると案の定、その晩夜中近くなつて、敵は義朝と清盛を大将にして、どんどん夜討ちをしかけて来ました。

頼長はまさかと思つた夜討ちがはじまつたものですから、今

更のようにあわてて、為朝のいうことを聞かなかつたことを

後悔しました。そして為朝の御機嫌をとるつもりで、急に新

院に願つて為朝を蔵人という重い役にとり立てようとい

ました。すると為朝ためともはあざ笑わらつて、

「敵てきが攻せめて来きたというのに、よけいなことをする手間てまで、なぜ早く敵てきを防ふぐ用意よういをしないのです。蔵人くらんどでもなんでもかまいません。わたしはあくまで鎮西ちんぜい八郎はちろうです。」

ところりっぱにいいきつて、すぐ戦場せんじょうに向むかつて行きました。

為朝ためともが例れいの二十八騎きをつれて西にしの門もんを守まもつておりますと、そこへ清盛きよもりと重盛しげもりを大將たいしょうにして平家へいけの軍勢ぐんぜいがおしよせて来きました。

為朝ためともはそれを見みて、

「弱虫よわむしの平家へいけめ、おどかして追おいはらつてやれ。」

と思ひまして、敵がろくろく近づいて来ないうちに、弓に矢をつがえて敵の先手に向かつて射かけますと、この矢が前に立つて進んで来た伊藤六の胸板をみごとに射ぬいて、つきぬけた矢が後ろにいた伊藤五の鎧の袖に立ちました。

伊藤五がおどろいて、その矢をぬいて清盛の所へもつて行つて見せますと、並みの二倍もある太い篋の先に大のみのようなやじりがついていました。清盛はそれを見ただけでふるえ上がつて、

「なんでもこの門を破れという仰せをうけたわけでもないのだから、そんならんぼう者のいない外の門に向かうことにしよう。」
と勝手なことをいいながら、どんどん逃げ出して行きました。

するとこんどはにいさんの義朝よしともが平家の代わりへいけに向かつて来きました。にいさんはにいさんだけの威光いこうで、いきなりしかりつけて為ためとも朝あそを恐れ入いらしてやろうと思おもつたと見みえて、義朝よしともは為ためとも朝あその顔かおの見みえるところまで来きますと、大きな声こえで、

「そこにいるのは八郎はちろうだな。にいさんに向むかつて弓ゆみをひくやつがあるか。はやく弓矢ゆみやを投なげ出だして降参こうさんしないか。」

といたしました。

すると為ためとも朝あそは笑わらつて、

「にいさんに弓ゆみをひくのがわるければ、おとうさんに向むかつて弓ゆみをひくあなたはもつとわるいでしよう。」

とやり込こめました。

これで義朝よしとももへいこうして、だまってしまいました。そしてくやしまぎれに、はげしく味方みかたにさしずをして、めちやめちやに矢やを射いかけさせました。

為ためとも朝あさはこの様子ようすをこちらから見て、大将たいしょうの義朝よしともをさえ射落いおとせば、一度どに勝負しょうぶがついてしまうのだと考えかんがえました。そこで弓ゆみに矢やをつがえて、義朝よしともの方ほうにねらいをつけました。

「あの仰あおむけている首筋くびすじを射いてやろうか。だいぶ厚あつい鎧よろいを着きているが、あの上うへから胸板むないたを射いとおすぐらいさしてむずかしくもなさそうだ。」

こう為ためとも朝あさは思おもいながら、すぐ矢やを放はなそうとしましたが、ふと、「いや待まて。いくら敵てきでもにいさんはにいさんだ。それにこうし

て父子わかれわかれになつていても、おとうさんとにいさんの間に内しよの約束があつて、どちらが負けてもお互いに助け合うことになつてゐるのかもしれない。」

と思ひ返して、わざとねらいをはずして、義朝の兜に射あてました。すると矢は兜の星を射けずつて、その後ろの門の七八寸もあるうという扉をぶすりと射ぬきました。これだけで義朝は胆を冷して、これも外の門へ逃げ出して行きました。

こうして為朝一人に射すくめられて、その守つてゐる門にはだれも近づきませんでした。なんといつても向こうは人数が多い上に、こちらの油断につけ込んで夜討ちをしかけて来たのですから、はじめから元気がちがいます。とうとう外の門が一つ一

つ片かたはしからうち破やぶられ、やがてどつと総そうくずれになりました。
 こうなると為ため朝ともひとり一人いかに力りきんでもどうもなりません。例れいの
 二十八騎きもちりぢりになつてしまつたので、ただ一人近江ひとりおうみの方ほうへ
 落おちて行きました。

その後のち、新院しんいんはおとらわれになつて、讃岐さぬきの国くにに流ながされ、頼よ
 長りながは逃にげて行く途とちゆう中だれが射いたともしれない矢やに射いられて死し
 にましました。

おとうさんの為ためよし義はじめ 兄きようだい 弟いたちは残のこらずつかまつて、
 首くびをきられてしまいました。

その中ためともで為ためとも朝ひとりは一人、いつまでもつかまらずに、近江おうみの田舎いなか
 にかくれていましたが、戦いくさの時ときにうけたひじの矢やきずがはれて、

ひどく痛み出したものですから、ある時とき近所きんじよの温泉おんせんに入はいつて
 矢やきずのりようじをしていました。するとかねてからためとも為朝ためとものゆ
 くえをさがしていた平家へいけの討うつ手てが向むかつて、ためとも為朝ためともの油断ゆだんをね
 らつて、おおぜい大勢ど一度におそいかかつてつかまえてしまいました。
ためとも為朝ためともはそれから京きやうと都ひへ引かれて、首くびをきられるはずでした
 が、てんし天子てんしさまはためとも為朝ためともの武勇ぶゆうをお聞ききになつて、
 「そういう勇士ゆうしをむぎむぎと殺ころすのはもつたない。なんとかし
 て助たすけてやったらどうか。」
 とおつしやいました。そこでためとも為朝ためともの死罪しぎいを許ゆるして、その代かわり
 強つよい弓ゆみの引ひけないように、ひじの筋すじを抜ぬいて伊豆いずの大島おおしまに流ながし
 ました。

ためとも
 為朝は筋すじを抜ぬかれて弓ゆみは少すこし弱よわくなりましたが、ひじがのび
 たので、前まえよりもかえつて長ながい矢やを射いることができるようになり
 ました。

五

ためとも
 為朝ためともは大島おおしまへ渡わたると、

「おれは八幡はちまんたろう太郎まごの孫まごだ。この島しまは天子てんしさまから頂いただいたものだ

。」

といつて、島しまを討うち従したがえてしまいました。そのうち方々ほうぼうにか
 くれていた為朝ためともの家来けらいが、一人二人ひとりふたりとだんだん集あつまつて来きて為た

めとも
朝につきました。

「九州きゆうしゆうよりはずっと小さいが、また為朝ためともの国くにができた。」
こういつて、為朝ためともはここでも王さまおうのような威勢いせいになりました。

ある時とき為朝ためともは海うみばたに出て、はるか沖おきの方ほうをながめています
と、白しろいさぎと青あおいさぎが二羽わつれ立たつて海うみの上を飛とんで行きま
す。為朝ためともはそれをながめて、

「わしかなんぞなら知しらないが、さぎのような羽はねの弱よわいものでは、
せいぜい一里りか二里りぐらいしか飛とぶ力ちからはないはずだ。それがあ
して行くところを見ると、きつとここからそう遠とおくないところに
島しまがあるにちがいない。」

といつて、そのまま小船にとび乗つて、さぎの飛んで行つた方角に向かつてどこまでもこいで行きました。

その日一日こいで、海の上で日がくれましたが、島らしいものは見つかりません。夜はちようど月のいいのを幸いに、またどこまでもこいで行きますと、明け方になつて、やつと島らしいものの形が見えました。

為朝はだんだんそばへよつてみますと、岸は岩がけわしい上に波が高いので、船が着けられません。さんざん回りをこぎ回りますと、やつと平らな州のようところがあつて、島の中から小さな川がそこに流れ出していました。

為朝はそこから上がつて、ずんずん奥へ入つて見ますと、一

めん、岩いわでたたんだような土地とちで、田たもなければ畠はたもありません。ところどころに見みなれない草木くさきが生はえて、珍めづらしい匂においの花はなが咲さいていました。

いくら歩あるいても家いえらしいものも見みえませんでした。そのうちいつどこから出きて来たか、一丈じようせいも背たかの高たかさのある大おお男おとこがそのそと出きて来きました。まっくろな体からだに毛けがもじやもじや生はえて、頭あたまの髪かみの毛けはまっ赤かで、針はりを植うえたようでした。

ためとも 為た朝あは不思議ふしぎに思おもつて、

「この島しまは何なんという島しまだ。」

と大おお男おとこの一人ひとりに聞ききますと、

「鬼おにガ島しまといいます。」

とこたえました。

為朝ためともは、いよいよ珍めづらしく思おもつて、

「じゃあお前まえたちは鬼おにか。それとも先祖せんぞが鬼おにだったのか。」

とたずねました。

「そうです。わたくしどもは鬼おにの子孫しそんです。」

「鬼ガ島おにしまなら、宝たからがあるだろう。」

「むかしほんとうの鬼おにだった時分じぶんには、かくれみのだの、かくれがさだの、水の上を浮うく靴くつだのというものがあつたのですが、今いまでは半はん分ぶん人にん間げんになつてしまつて、そういう宝たからもいつの間まになくなくなつてしまいました。」

「よその島しまへ渡わたつたことはないか。」

「むかしは船ふねがなくなつても、ずんずん、よその島しまへ行つて、人をとつたりしたこともありましたが、今いまでは船ふねもないし、たまによそから風かぜにふきつけられてくる船ふねがあつても、波なみが荒あいので、岸きしに上あがろうとすると岩いわにぶつかつて碎くだけてしまふのです。」

「何を食たべて生いきている。」

「魚さかなと鳥とりを食たべます。魚さかなはひとりで磯いそに上あがつて来きます。穴あなを掘ほつてその中なかにかくれて、鳥とりの声こゑをまねていると、鳥とりはだまされ穴あなの中なかにとび込こんで来きます。それをとつて食たべるのです。」

こういつている時ときに、ひよどりのような鳥とりがたくさん空そらの上うへをかけた来きました。為ためも朝あしたはもつて来きた弓ゆみに矢やをつがえて、鳥とりに向むかつて射いかけますと、すぐ五六羽ばばたと重かさなり合あつて落おち

て来きました。

島しまの大男おおおとこは弓矢ゆみやを見たみのは初はじめてなので、目をまるくして見てみいましたが、空そらを飛とんでいるものが、射落いおとされたのを見みて、舌したをまいておじおそれました。そして為ためとも朝あさを神かみさまのように敬うやまいました。

為ためとも朝あさは鬼ガ島おにしまを平たいらげたついでに、ずんずん船ふねをこぎすすめ、やがて伊豆いずの島しま々じまを残のこらず自じぶん分の領りようぶんにしてしまいました。そして鬼ガ島おにしまから大男おおおとこを一人ひとりつれて、大島おおしまへ帰かえつて来きました。

大島おおしまの者ものは、為ためとも朝あさが小船こぶねに乗のつて出たなり未だいまに帰かえつて来こないので、どうしたのかと思おもつていますと、ある日ひ恐おそろしい鬼おにを

つれてひよっこり帰かえつて来たきので、みんなびっくりしてしまいま
した。

六

こうして為ためとも朝あさは十年ねんたたないうちに、たくさんの島しまを討うちたが
えて、海うみの王おうさまのような勢いきおいになりました。すると為ためとも朝あさのた
めに大島おおしまを追おわれた役やくにん人がくやしがつて、ある時とき都みやこのに上のぼり、
為ためとも朝あさが伊豆いずの七島しちとうを勝かつて奪うばった上に、鬼ガ島おにしまから鬼おにをつれて
来きて、らんぼうを働はたらかせている、捨すてて置おくと、今いまにまた謀反むほんの
戦いくさをおこすかもしれませんといいて訴うった。

天子さまはたいそうおおどろきになり、伊豆の国司の狩野介
 茂光げみつ というものにたくさんの兵へいをつけて、二十余艘よそうの船ふねで大
 島まをお攻めせさせになりました。

為朝ためともは岸きしの上からはるかに敵てきの船の帆ほかげを見ると、あざ笑わら
 いながら、

「久しぶりで腕うでだめしをするか。」

と、例れいの強つよい弓ゆみに長ながい矢やをつがえて、まっ先さきに進すすんだ大
 きな船ふねの胴腹どうばらをめがけて矢やを射い込みました。すると船ふねはみごと
 に大穴おおあながあいて、たくさんの兵へいを乗のせたまま、ぶくぶくと海うみの
 中に沈しずんでしまいました。敵てきはあわてて海うみの中でしどろもどろに
 乱みだれて騒さわぎはじめました。

為^{ためとも}朝^{あさ}はつづいて二の矢^やをつがえようとしたが、船^{ふね}を沈^{しず}め
 られた大^{おお}ぜいの敵^{てき}兵^{へい}が、おぼれまいとして水の中であつぷ、あ
 つぷもがいている様子^{ようす}を見ると、ふとかわいそうになつて、
 「かれらはいいつけられて為^{ためとも}朝^{あさ}を討^うちに來^きたというだけで、も
 とよりおれにはあだも恨^{うら}みもない者^{もの}どもだ。そんなものの命^{いのち}をこ
 の上^{うへ}むだにとるには忍^{しの}びない。それにいつたんこうして敵^{てき}を退^{しりぞ}け
 たところで、朝^{ちようてき}敵^{てき}になつていつまでも手^て向^むかいがしつづけら
 れるものではない。考^{かんが}えて見^みると、おれもいろいろおもしろいこ
 とをして來^きたから、もう死^しんでも惜^おしくはない。おれがここで一^ひ
 人^{ひとり}死^しんでやれば、大^{おお}ぜいの命^{いのち}が助^{たす}かるわけだ。」
 こういつて、為^{ためとも}朝^{あさ}はそのままうちにかえつて、自^じ分^{ぶん}の居^い間^まに

はいると、しずかに切腹^{せつぷく}して死^しんでしまいました。

そのあとで寄せ手^{よせて}は、こわごわ島^{しま}に上^あがって見^みて、為朝^{ためとも}が一^ひ人^{ひとり}でりっぱに死^しんでいるのを見^みてまたびつくりしました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「鬼ガ島」の「ガ」は底本では小書きになっています。

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

鎮西八郎

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>